

はじめに

—まち空間をつくるということ—

島添 貴美子
KIMIKO SHIMAZOE

■人とまち空間

本誌は、富山県高岡市と富山大学芸術文化学部の連携協定の一環として、2012年より発行が始まった『都萬麻』の第2期第2巻である。第2期では特集と銘打って、テーマを絞り込み、各方面でそのテーマに取り組んでおられる方々から寄稿いただくことで、様々な視点から、特集テーマを深掘している。

本巻の大きなテーマは、第1巻に引き続き、移住定住である。第1巻では、移住定住をソフト面(心)に焦点をあてて深掘したが、本巻では「まち空間の再生と創造」に焦点をあてて、住みたいまちをつくる試みを集める。

「まち空間の再生と創造」というと、たとえば駅前再開発や、道路や公共施設といったインフラの再整備など土木・建築の見識や技術が欠かすことができない。しかし、同様に、あるいはそれ以上になければならないのが、まち空間に生きる人々の存在と彼らの思いである。

2018年7月11日付の読売オンライン「迫る『超ソロ社会』…ひとりで死ぬのは宿命なのか?」という記事(*1)によると、既婚未婚を問わず单身者が国民の過半を占める「超ソロ社会」の到来にむけて、孤独死に対する社会的な関心が高まっているという。この記事で紹介されているのが、「ホームホスピ

*1 藤和彦「迫る『超ソロ社会』…ひとりで死ぬのは宿命なのか?」読売オンライン2018年7月11日
<https://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/ichiran/20180706-0Y18T50021.html>

ス」や認定NPO法人エンディングセンターによる「桜葬」である。「ホームホスピス」とは、「住み慣れた地域の中にあるもう一つの『家』にケアを必要とする人々が暮らし、ホスピスケアのチームが入ってサポートする仕組み」(*2)であり、NPO法人エンディングセンターによる「桜葬」では、桜葬墓地の近くに軒家を設け、定期的に会員が集うことで、生前より「墓友」(*3)を作る活動を支援しているという。人々が人生の最後まで独りではないことを実感しながら生きていくことができるような社会とは、これからの理想的な社会の形なのかもしれない。そして、こうした社会をつくるためには、大なり小なりの程度の差はあれども、まち空間を再編していくことが不可欠である。

■まち空間の再生と創造

本巻は、「まち空間」を切り口に、アーティスティックなまち空間の創作、産官学の連携による市民主体のまちづくり、そしてまち空間からみた高岡の3つのトピックスで構成されている。

まず、アーティスティックなまち空間の創作として、鳥越けい子氏と林匡宏氏に寄稿いただいた。お二人は、それぞれ、ご自身の専門を生かして、まち空間の創造に携わっている。

鳥越氏は日本におけるサウンドスケープ研究、およびサウンドスケープ・デザイン^①の第一人者である。サウンドスケープ(音風景)を意識しながらまち空間を眺めると、普段、視覚に頼りがちな感覚では気づかない様々な発見がある。鳥越氏が、1990年頃に手掛けた大分県竹田市の瀧廉太郎記念館における「音

*2 一般社団法人全国ホスピス協会のWebサイトを参照のこと。
<https://homehospi.jp/org/>

*3 認定NPO法人エンディングセンターのWebサイトによると、「墓友」とは、「同じ理念の墓を選んだ人たちの交友関係の一つ、あるいは仲間意識をいう」という。
<https://www.endingcenter.com/friends/>

風景からの庭づくり」は、明治時代に活躍した作曲家滝廉太郎が子供の頃に体験したサウンドスケープを我々が追体験する、いわば音のリノベーションである。鳥越氏のサウンドスケープ・デザインは、音のリノベーションにとどまらず、2000年以降、鳥越氏自身が生まれ育った善福寺池とその周辺地域で展開している。アートによるまちづくりイベントの一環として、2010年より始まった「池の畔の遊歩音楽会」は、東京都杉並区の善福寺池を舞台に、この地にまつわる民話や歴史、自然を題材とした歌やパフォーマンスを仕掛けていくが、ここで歌われ、演じられた作品たちは音楽会が回を重ねるごとに、この地に蓄積されていく。この音楽会は地元の人々のリピーターも多く、「個人の表現」であるアートが、この地の人々の「共同体の表現」になっていくのか、鳥越氏の模索は続いている。

一方の林氏は、まち中に偏在する空き地・空き家や工事中の空間といった常設の状態ではない、いわば一時的な「仮設空間」を、まちづくりの実験場としての「仮説空間」とみなして、様々なアートプロジェクトを仕掛けている。林氏がこうした「仮説空間」において試みていることは、その空間とそこにいる人々の潜在力を掘り起こし、顕在化することである。しかも、こうしたプロジェクトをやること自体が目的ではなく、これをきっかけに、新しい人的交流や仕組みがつけられていくことが期待されている。このような林氏の試みは、どこまでも確信的にまち空間を創造していく。

阿久井康平氏と藪谷祐介氏は、産官学の連携によるまちづくりを例に、市民目線のまちづくりの重要性を改めて教えてくれる。

阿久井氏の「地方都市魚津における駅周辺のまちづくり」は、富山県魚津市において、駅周辺で現在進められているまちづくりを取り上げている。ここでは、駅を単なる交通インフラとしてだけではなく、駅を中心としたまち空間に再編することで、生活や産業・観光を活性化する可能性が論じられている。2017年8月から産官学によってつくられた魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会がうちだした方向性は、①駅によって東(山側)と西(海側)に分断されている市街地のシームレス化(分断の無い状態)、②駅から250m徒歩圏域内の生活機能の拡充、③駅と観光コンテンツ間のアクセスの改善である。特に、①と②はまち空間のコンパクト化であり、人口減少や高齢化を意識したまちづくりでは欠かすことができないと思われる。

藪谷氏の「公共空間をまちへ文脈化する」は、ハコモノ行政の反省から生まれた公共空間の市民参加型デザインの例として、埼玉県北本市の「北本らしい顔」の駅前づくりプロジェクトを取り上げている。北本市は東京のベッドタウンであるが、これから予想されるコミュニティの超高齢化にあたって、駅前広場を「交通広場」から「交流広場」へと転換させることで、中心市街地の活性化が期待された。このプロジェクトは、単なる駅前広場の再開発にとどまらず、まち全体を調査し、市民参加のワークショップを重ねることで、まちづくりプロジェクトへと発展し、駅前広場の改修後もまちづくりマネジメントの体制が引き継がれている。このプロジェクトは、多くの市民が関わっているが、議論が混乱・迷走しにくい体制づくりによって、市民が主体的にまちづくりに関与できたところにプロジェクトの成功要因があると思われる。

ここからは富山県高岡市を例に、まち空間からみたまちづくりを扱う。

まず、藪谷智恵氏は、2018年に高岡市へ転入し、現在、初めての子育ての真っ最中である。富山型子育てといわれるように、富山県では子育てに夫婦の両親（子供にとっては祖父母）が積極的に関与することが一般的である。そんな中、夫婦ともに実家から遠い高岡市で、しかも初めての子育てを経験するのはどんなにか心細いだろうと思う。そんな藪谷氏には、子育て中のママ目線で高岡をみていただいた。土地勘のないママにとって、信頼できる病院や保育園、安全な遊び場がどこにあるかは分からない。そこでまず、藪谷氏がやったことは自らベビーカーを押して、まちに出ることだった。そして、そこで発見されたことは、子供が過ごすことを前提として作られた安心・安全で便利な空間とそうでない空間があり、前者の空間には、子供だけでなく、多くの人も集まるということであった。ところが、「若いママが思う以上に子供の価値を教えてくださいるのは、後者の空間にいる人々である」と藪谷氏はいう。不慣れた空間だからこそ、人々は互いを見守り、助け合っている。そこには古き良き時代のコミュニティが、今でも生きているといえるだろう。

横山天心氏と萩野紀一郎氏からは、高岡市内における富山大学芸術文化学部プロジェクト授業の成果を報告いただいた。これらのプロジェクトの成果は、いずれも地域住民有志による草の根の団体との協同抜きには語ることはできない。

横山氏の「宿泊体験施設『さまのこハウス』」は、高岡市の中心市街地、金屋町の住民による草の根のプロジェクト「金屋町元気プロジェクト」と富山大学

芸術文化学部との協同によって実現した古民家再生の一例である。現在ではトレンドとなっている古民家再生とは、古民家の良さを生かしつつ、現代生活に合った形にリノベーションすることである。「さまのこハウス」は移住希望者のための長期滞在用の施設として再生された古民家だが、さまざまな規制や制約、予算の問題等々を乗り越えて、単なるリノベーションを超えた「伝統的なに創造的」な魅力ある空間を作り出すことができた例といえるだろう。

萩野氏の「吉久の町家×芸術×学生シェアハウス計画の始動」は、高岡市吉久地区を例に、歴史的な街並み保存と少子高齢化・空き家・空地の増加問題を両立させるべく新しい生活環境を作り出す試みである。萩野氏自らが吉久地区借りている町屋（旧藤田家）を学生シェアハウスにリノベーションする計画は途に就いたばかりだが、吉久地区の住民による「NPOみらいプロジェクト」との協同が今後のカギとなるだろう。

本巻のすべての論考が、さまざまな規制や限りある予算の中で、まち空間の再編に知恵を絞り、試行錯誤する苦勞が垣間見られる。それと同時に、こうした試みが、その空間に生きる人々の積極的な関与があって初めて実現するものであるといえよう。執筆者たちとまちの人々の協同作業によって生まれた物語をぜひお楽しみいただきたい。